

花

野

集

全



一翁無適居士辭世

根一傳るるもたのり花野



四季之遺吟

歴代宗師の應答あり
白きりて多し出に

塵塚一魏の世も日や柳乃正
合歡の世乃勝とささる夕部
砧の世も乃る所新中鴨の夢
乞食れ軒すま自一も亦月

けり人を行馬の若かりと交る
くも武より刀槍れ御長一茶
慈乳法親王法流と世に流儀馬籠
てうらハ門に於ける書りあまのりさ
凡雅ハ傳を先師に夢ひたれ米村
古梁一樂二作を授て乞くつ
あたりさとうけぬまの平生社

三老の陰入りて病中れ贈るより
ゆて海世の一日をえん予に推放と
とらあゝ馬籠誰かこれを感歎をせん
中津子をかむへ之歎の五十九
こゝ初秋之日身はるる一八遠處
の社友とてに慈愛をこり一馬
るれ花傳の書や海をんとなし
やもいゝと後とるる一物
あつたあつたの花雪紙の終れ旅
消くつりし恩の送火 竹昧

中津子
花

左の乃美の出入り為さく 朝

花のうらみと云ふはぬと 如泉

兼洲のやうなまゝも濡り 廿根

借増の金にまけて花の利 青季

毎日の言にまゝの星なり 寄調

雨乃あつれいさく 條 揚宅

けさのなほ子乳母のまぢり 以匡

湛々くはぬあまけ 一 駿

一 掉り花の陰まての初り 亦 湖荒

沈こさくてもいさむ 隼 念珠

^二 悪た府と字路の名立ていさく 麦浪

酒乃産駒とて梅子子 枕 珠簾

松枝の弓くくして蓋の向 ぬ琴

神もあ都のまぢり 小物

けさの陰高に尾目かま 燕花

幸と園とて清所の黛 柳圃

舟細く癒しも氣の薄うらん 花園
 心く来りりく 築き花の結 杏柯
 南朝の祿文よりあはれなき 二花
 人乃ちぬは道は枝折戸 弁星
 あそめむも別やとむらん 甘露
 夕よの悪夢し 和けるも 五醉

七柱奇縁

不肖亦映まのあふうりてりて年
 日と好まされは文よやあやうに幸う
 れつ方なうとくいとくまををす
 まくくすりりもく終に信ふは
 報さのあ熱情のやうくはくは
 向ひむらまのあは映とくく遺
 吟を唱くは松青稽首石解し

花野りく逢とあひり 木かひり 彦映

けまきふた動静あはれけりて
 如しとあはれり

枯しよとさうとや 結とわく物 珠菴

けえまの二の国より来たらむ老を
一して三十五年の四支かりては
ふつむいれしき痛くらからむ
かゝる歌きまひわらむ女梅

りけて老お身よりむ別せす日小
把事

終れ終るもよの終りむやうらむ
不終るもよの終りむやうらむ

る向もやこも終るもよの終りむやうらむ
草忠花

草忠花ありて計多よむとなく

亡便もくやなむこのおしれ
白



平直居士の指を陽巖禪とよまうて

草にまゆを海もあましくや
新

流をまゆにまゆとては茶の一味ありと
生茶のわらうを海巖

新茶の茶れゆまといひ亡流も
花国

各拾名名録

あまたあましたるぬあや新の松
伊月 大星 甘雪
は新 大星 清の松の也林の松
以匡

雨の日にさきと綿の雲と雪菊中 吾久 寄調

秋の夕の霞をよみておやこころれを 聖高 橘窓

いれは方の池はあやあし 池田 一鏡

来りしや三月の月 池田 一星あり 其根

轉ひ身をかきれ石の振子哉 平生私 春寺

福利 平生私 一回に御りきり月の強 五醉

野の末と雪掃く風の尾花は 湖荒

松の根を流すて信 秋の夜 麦浪

杉凡とよふと交し 全柳

雲の人のれをく 吾柯

山に秋の霧 如泉

春里乃煙 珠菴

鳥の力のさし 亦里

新草 知床

入る月 如琴

花の影 亦映

かゝせし起雲りそり雨乃萩 新巻
照く川そりそり山まがれり 柏花
福藁やふもてぬ浪の母構 浪花
新巻や初涼一さか咲き 百巻
身てまけそ川白ひくすく懸 孤松
引てやあつてきまの写り 野馬
肝心の口をまの菊の蒼の那 免丸
躑子やふれ是東北の山 荷葉

却りろふ新くらしむ碇うれ 増田 為家
老て初々味や世の回鳴鶴 白崎 某一
月の裏も乃知云々も居れ多 海川 愚為
追まき世り約や秋の風 柳系 把家
いささみの新巻うりて海志の 二巻

俣河州無道

蓬の美乃花

海風

帰る女は可憐

蕉門書林

皇都寺町通二條
橘屋治兵衛梓

